

日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する 事例的研究 (Ⅲ)

宮 川 充 司 ・ 中 西 由 里

Caso-Pesquisa sobre Adaptação Intercultural das Crianças Nipo-Brasileiros (III)

Juji MIYAKAWA e Yuri NAKANISHI

国際化社会の進展とともに、子どもたちの世界にも、急激に異文化接触の機会が増大してきている。海外日本人子女・帰国子女・在日外国人子女といった国境あるいは複数の文化間の壁を乗り越えて、独自の異文化適応の体験をする子どもたちが、増えているからである。ここに、子どもたちの異文化適応の問題が、現実の社会問題となりつつある。

子どもの異文化適応は、それなりに大変であるが、大人のそれに比べると、相対的に容易であるということが、理論上想定できる。勿論、一口に子どもの異文化適応といっても、子どもの所属する母文化および移行する異文化の特色・差異、あるいは最初の異文化接触時の年齢や性格、同行した家族の適応状況、受け入れ機関の対応の仕方といった要因によって、適応状態あるいは適応のパターンには、さまざま個人差が存在してくる。そうした意味で、こうした子どもの異文化適応における個人差の発生メカニズムを解明する研究の必要性が、迫られている。

こうした研究上の視点から、宮川・中西 (1984) は、1992年9月自由保育を主体とする保育園に受け入れた、2名の日系ブラジル人幼児の最初の約6か月間の異文化適応過程に関して、ビデオカメラ収録を用いた自然的観察法により、精密な縦断的資料を収集し、事例の質的分析を行った。また、中西・宮川 (1984) は、その2名の日系ブラジル人幼児の異文化適応初期にあたる最初の3か月間について、仲間遊びの構成員および遊び場面で使用された言語について、出現頻度に関する数量的な分析を行った。

研究の主対象とした2名の幼児のうち、年齢5歳7か月で5歳児クラスに入園した女兒 (日系ブラジル人4世) は、入園当初から片言の日本語が話せ、また、性格的にも大変開放的で社交的であったため、日本人幼児とも積極的に仲間関係を展開し始め、急速に日本語の会話力を高めていった。この事例は、日系ブラジル人幼児の中に比較的多く見られがちな1つの異文化適応のパターンを示しているものと推定できる。つまり、日系ブラジル人の子どもの多くは、母国において、日本文化や日本語の痕跡を留めたバイカルチュラル・バイリンガルの環境の中で発達し、日本文化・日本語環境に移行してくる子どもたちが多いと考えられる。そのため、早期から日本の文化的環境への同化行動を示し始めるパターンの子どもの多いということが、理論上推定できるからである。

一方、5歳4か月で4歳児クラスに入園した男児 (同じく日系ブラジル人4世) の事例は、全く日本語が話せなかったにもかかわらず、入園1か月過ぎには2語文程度の片言日

本語を話し始め、日系ブラジル人の幼児を中心に、活発な仲間関係を展開し始めていた。しかし、入園2か月半頃、同じクラスに日系ブラジル人の男児が他の保育園から転入してきた頃から、一種の閉鎖的な雰囲気のある日系ブラジル人グループを構成し始め、そのため日本人幼児との仲間関係には大きな展開が見られなかった。この状態は、一見、異文化不適應とも見られるような特異な適應のパターンではあったが、目立った攻撃行動や引きこもりといった社会的不適應行動は伴わなかったし、異文化ストレスをうかがわせるような行動上の所見も觀察されなかった。ただし、もっぱら母語であるポルトガル語をコミュニケーション言語とする仲間関係で日常的な多くの時間を費やしたため、それに対応して、入園1か月半頃までに見られたような順調な日本語の進歩は、非常にゆっくりとしたペースのものとなった。

この後者の事例（日系ブラジル人男児）の異文化適應過程は、この保育園が、偶々、園児の主体的な仲間関係の展開を尊重する自由保育主体の保育園であり、さらに16名程の日系ブラジル人園児が同時期に在園したという条件が重なって、展開されたものと推定できる。したがって、この事例は、異文化不適應症例ではなく、あくまで異文化適應の1つのパターンという可能性がある。なぜならば、異文化環境にあって、1つのエスニックな集団を構成し、それを異文化適應の基盤にして、異文化環境での適應をはかっていくというのは、大人の異文化適應パターンとしてなら、決して珍しいことではないからである。

いずれにせよ、子どもの異文化適應過程の精密な事例研究は、ダイナミックな変化の見られる適應初期だけでなく、宮川・浅井（1988, 1989）が在日アメリカ人幼児の事例研究で試みたように、さらに継続的な縦断的研究を要する。

そこで、本研究は、ほぼ同一の研究方法で継続的な觀察が可能であった上述の日系ブラジル人男児の事例について、さらに入園7か月から1年1か月までの觀察資料の質的な分析を行うこととする。なお、相当する時期に小学校に移籍したため、学級担任教諭等の面接調査といった研究方法に切り替えざるを得なかった、もう一人の幼児の事例については、紙面の制約上、別の機会に報告を委ねるものとする。

方 法

【対象児】 まず、本研究の主対象とする日系ブラジル人幼児、ジュニオール（仮称）について概述する。詳細は、宮川・中西（1984）に記述してあるので、そちらを参考のこと。

本対象児は、来日直後の1992年9月1日、豊田市立I保育園に、5歳4か月で4歳児クラスに入園した日系ブラジル人4世の男児。父方の祖母が、日系人2世ということで、家庭の中の日本文化の痕跡は、非常に薄いと推定できる。家族構成は、1人っ子で、両親とともに来日し、近くの日系ブラジル人が特に多いH団地の集合住宅に居住している。入園時、日本語は0ともいってよい状態であったが、入園1か月半頃には、2語文程度の日本語を話し初め、活発な仲間関係の展開を始めていた。

しかし、自由な仲間遊びの相手は、もっぱら同年齢のチアゴ（仮称：先行研究では、Tとしていたが、イニシャルの多用は煩雑で紛らわしいので、他の日系ブラジル園児と同様に、仮称のニックネームに改める）やジェゴ（仮称：先行研究ではG）、5歳児クラスのミカエリやシルバといった日系ブラジル人幼児であった。また、ジェゴが他の保育園から

同じクラスに転入してきた頃から、チエゴにジエゴを加えたやや閉鎖的な雰囲気のある仲間集団を構成し、そのため日本人幼児との仲間関係の展開や日本語会話の進歩といった側面では、一時的な停滞現状ともいえる状態を呈していた。なお、本論文が対象期間とする1993年度の4月1日時点では、対象児の年齢は5歳11か月となっていた。また、同年11月から12月の期間、一時帰国のため保育園を休園した。

1993年度、本対象児の所属する豊田市立I保育園に在籍する日系ブラジル人は、年度当初、表1に示すような構成となっている。本対象児と前年度親密な仲間関係を展開した、チアゴやジエゴも、同様に5歳児クラスに進級したが(クラス編成も、前年度とほぼ同一で、本対象児のクラス担任も同じ保母のまま)、1歳上のクラスに属したミカエリやシルバは近くの小学校に進学している。本対象児と同じ5歳児クラスには、新しくグスタボ(仮称)という男児が4月に加わっている。なお、その新年度4月には、5歳児クラスでは1

表1 I 保育園における日系ブラジル人の子どもたちの概要
(1993年度在園児：人名は仮称；*は、1993年度新入園児)

5歳児クラス (計4名)	
あやめ組	
ジュニオール	(研究主対象の男児, 1992年9月1日入園, 1993年11月から12月上旬まで一時帰国) 一人っ子
ジエゴ	(男児, 1991年4月から1年間在園, 他の保育園に転入の後1992年11月16日から復園) 復園後すぐにジュニオールと仲良しになる。3人きょうだいの末っ子。兄と姉は小学生。
すみれ組	
チアゴ	(男児, 1991年4月入園) ジュニオールの入園後、太の仲良しとなる。3歳児クラスのジョニーの兄。
グスタボ*	(男児, 1993年4月入園) 3歳児クラスジョアナの兄。
4歳児クラス (計4名)	
ひまわり組	
ヘンリ	(男児, 1992年4月入園) 一人っ子
ガブリエラ*	(女児, 1993年4月入園) 2歳年下の妹がいるが、未就園
もみじ組	
カイオ	(男児, 1991年4月入園) 一人っ子
トミオ	(男児, 1991年6月入園, 1993年4月末で退園帰国)
3歳児クラス (計7名)	
ちゅうりっぷ組	
エリッキ*	(男児, 1993年4月入園) 一人っ子
ジョニー	(男児, 1991年4月入園) 5歳児クラスチアゴの弟
タチアニ*	(女児, 1993年4月入園9月に他園に転出) 小学生の姉がいる
レチシア	(女児, 1991年4月から1年間在園し退園の後, 1993年4月再入園) 3歳下の弟がいるが、未就園
さくら組	
アンドレ*	(男児, 1993年4月入園) 一人っ子
アキラ	(男児, 1992年4月入園) 小学生の姉がいる
ジョアナ*	(女児, 1993年4月入園) 5歳児クラスグスタボの妹
0～2歳児クラス (計4名)	
ハルミ	(女児, 1992年4月入園) 一人っ子
チエミ	(女児, 1992年5月入園) 一人っ子
リエ	(女児, 1992年6月入園) 一人っ子
メラニ*	(女児, 1993年5月入園) 一人っ子

名, 4 歳児クラスでは 1 名, 3 歳児クラスでは 5 名 (うち 1 名は復園) の日系ブラジル人幼児が入園し, 5 月には 0 ~ 2 歳児クラスに 1 名の日系ブラジル人乳児が入園している。

【資料の収集と分析の方法】 基礎的な資料の収集方法は, 宮川・中西 (1984) と基本的に同一な方法による。すなわち, 主対象児ジュニオールに焦点を合わせ, 自然的観察法の手法により, フルオートの軽量ビデオカメラ (Panasonic のブレンビーシリーズ NV-T1; 16倍デジタルズームカメラ) を使用して, 定期的に行動観察資料を収集した。行動観察は, 表 2 に示すような日程で, 1993 年 4 月から定期的に毎週 1 回午前中の自由遊び時間を中心に行ったが, ほぼ同時並行で進行していた, 日系ブラジル人の新入園児の行動観察プロジェクトの関係もあり, 1 回あたり約 20 分から 1 時間相当のものまで, 観察時間についてはある程度の幅がある。

表 2 ビデオによる行動観察実施日

1993 年	4 月	14 日・21 日・28 日 *
	5 月	12 日・19 日・26 日
	6 月	2 日 *・16 日・21 日・25 日
	7 月	7 日・13 日・20 日・28 日
	8 月	
	9 月	22 日
	10 月	6 日・20 日 *・29 日

注: * 園外保育等の行事の関係で, 他のものと比較困難なので, 最終的に分析対象から外したものの。

行動観察は, 4 月 14 日から, 夏期期間を除いた 10 月 29 日まで, 継続実施したが, 同年 11 月から 12 月までの期間, 対象児が一時帰国のため休園する等の事情が生じ, 以後の定期的な行動観察が不完全となったので, 本論文では, 10 月 29 日分までを分析対象とした。なお, ビデオカメラによる収録は第 1 筆者が, 一貫して行い, 第 2 筆者が同時並行の補助記録を残している。その他, 折々の保母等の報告情報を補助記録として残し, 観察期間中である 8 月 19 日には, 日系ブラジル人の女性に通訳として同行していただいて, 家庭を訪問した。こうした補助情報は, 直接分析の対象とはしなかったが, 事例解釈の正確性を高めるための傍証的な情報として利用できた。

また, 収録した映像記録については, 誕生会や園外保育といった場面のもので, 自由行動が大きく制限されていたり, 詳細な音声分析が困難な部分等は, 分析対象から外した。そうした条件のものを除いて, 分析対象とした映像には, 自由遊び場面でないものも含まれているが, 対象児の異文化適応過程を記述するのに意味のあるものが含まれているので, 採用することとした。また, 結果的に, 1 回分の記録をすべて, 分析対象からはずしたものもある (表 2 参照)。

自然的観察法による映像資料は, 今回の分析も, 宮川・中西 (1984) で開発した質的分析とほぼ同一の方法により分析した。すなわち, ビデオテープによる映像資料を反復再生しながら, 対象児や周囲の幼児のかかわり行動を, 個々の出現行動毎に, 詳細な言語的自由記述資料に置き換え, 次の段階で, 仲間関係や言語表現の変化が的確に捉えられるようなエピソード単位に, 圧縮して分析した。また, 映像資料は, カラービデオプリンター (Panasonic の NV-MP1) により, 典型的な場面をスナップ写真化し, それをエピソード

単位の記述資料と照合させながら、対象児の異文化適応過程の全体像を再構成するという手法を採った。

結 果 及 び 考 察

ビデオによる映像資料を、本研究の主対象児ジュニオールの間関係の変化や言語的な変化（特に日本語会話の出現）の主要な2側面に沿って、エピソード単位の言語記述資料に圧縮変換した資料を、表3に示す。また、映像資料の典型的なエピソードを、象徴的に代表していると判断できる瞬間的な場面を、ビデオプリンターによりスナップ写真化したのが、補足資料の写真として掲載したものは、対象児の異文化適応の状態を象徴的に捉え、なおモノクロ写真化した場合でも、ある程度視覚的に鮮明な状態を維持できると判断したものを、抜粋掲載した。

表3 ジュニオールの仲間関係の変化と日本語の出現

年月日	エピソードの抜粋
1993年 4月14日 (入園7か月2週間)	<p>①一輪車を押している時、出会った日本人男児に「どいて」という。</p> <p>②ガブリエラとジェゴがままごとをしている所に、チアゴと一緒に加わる。会話は、ポルトガル語がほとんどだが、「チアゴのたんじょうび。」とか、「チアゴ、5さいになりました。6さいになりました。」といったチアゴを相手の会話で日本語が混じる。(写真1)</p> <p>③ガブリエラとの会話は、ポルトガル語だが、手に水をつけて光線を放つしぐさで、「オッカー、カメハメハ…しょうねんいさむボーイ」と攻撃するまねをしてふざける。(写真2)</p>
4月21日 (7か月3週間)	<p>①チアゴ、グスタボと3人グループで、鯉のぼりの共同製作。会話はすべてポルトガル語。(写真3)</p>
5月12日 (8か月2週間)	<p>①チアゴ、ジェゴに、クラスメイトの日本人男児が加わって、毛虫を捕獲して遊んでいる。会話は、大半が日本語で、時折ポルトガル語が混じる。「どこかあるよ。1こ。できない。」「できた。あった。1こ。」「けむしがあるよ。あった。けむしだよ。いっぱい、けむしあるよ。」「われらがおいき。いっぱいだよ。」「あるよ。ジェゴ、あそこーよ。」(写真4)</p> <p>②チアゴ、ジェゴと3人でジャングルジムに乗り、毛虫落としを始める。会話はポルトガル語に切り替わる。ジャングルジムから降り、日本人男児2名が加わると、「あやっ、うんこ。」「そこがある。いっぱいよ。」</p> <p>③ジェゴにポルトガル語で、怒鳴り、スコップを振り上げて、追い払う。再び、ジェゴとチアゴが来ると、同じようにポルトガル語で怒鳴り、スコップを振り上げて、追い払う。</p> <p>④4歳児クラスの日本人男児が3輪車でよってくると、日本語で「だめ」。</p>
5月19日 (8か月3週間)	<p>①教室で、牛乳パックを切ったものにマジックインキで、絵を描いている所に、チアゴがやってくると、ふざけて蹴ったり、首を絞めるまねをする。</p> <p>②ジェゴが寄ってくると、ポルトガル語で会話だが、日本語が混じる。「うまいぞ。」「ちがうよ。イチゴじゃない。」「あつ。これゴチャゴチャだよ。」「だてにしゃしんね。カメラは。カメラは。ジェゴ、カメラこれ。」(写真5)</p> <p>③ジェゴとチアゴの3人で、三輪車をひっくり返したものに、水をかけて遊んでいる。会話は、ポルトガル語。</p>
5月26日 (9か月)	<p>①砂場で、遊んでいるジェゴのそばに行き、腰掛ける。カイオが寄ってくると、ポルトガル語で話しかける。ジェゴとの会話も、ポルトガル語。</p> <p>②4歳児クラスの日本人男児が、バケツをもって来ると受け取る。(写真6)</p> <p>③ジェゴとの砂遊びに、チアゴがやって来て加わる。</p>

補足資料 ビデオプリンターで作成したジュニオールのスナップ写真
(写真下段の数値は、撮影年月日を表す。写真原版は、カラープリント。)



写真1 チアゴとままごとをしながら、「5さいになりました。…」(入園7か月2週間)



写真2 ガブリエラにふざける「オッカー、カメハメハ」(入園7か月2週間)



写真3 チアゴ、グスタボの3人で鯉のぼりの共同製作に熱中（入園7か月3週間）



写真4 仲良しのチアゴ・ジェゴ，日本人クラスメイトと毛虫採り（入園8か月2週間）



写真5 仲良しのジエゴと「ちがうよ。いちごじゃない。」(入園8か月3週間)



写真6 4歳児が、バケツを持ってくる(入園9か月)

日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例の研究（Ⅲ）

- ④チエゴ、ジェゴ、アキラの4人で、砂場で遊んでいるところに、担任の先生とジュニオールのクラスメイトがやってきて、のぞき込むが、担任が立つと日本人クラスメイトたちも、一緒に行ってしまう。会話は、ポルトガル語。
- 6月16日
(9か月2週間)
- ①5歳児クラスの園外保育から帰ってきて、大勢の子どもたちとたらいで足を洗うために押し合い並んでいる。チアゴが来ると、ポルトガル語で話しかけ、追いかけていく。
- 6月21日
(9か月3週間)
- ①紙を切り抜いて作った円盤を、チアゴと飛ばしてはしゃいでいる。会話は、ポルトガル語だが、途中「おお、すげー」といった歓声を日本語であげる。チアゴのまねをして、すれ違った1人の日本人男児の背中を円盤でたたいてふざける。(写真7)
- ②チアゴに加え、4人の日本人男児たちと色水遊びではしゃいでいる。クラスメイトたちが一人二人と加わっていく。チアゴとの会話は、ポルトガル語。ジェゴもやってくる。「かっこいいよ。まゆちゃん。」と叫ぶ。(写真8)
- 6月25日
(10か月)
- ①チアゴとグスタボの3人で、砂場でスコップを振り回したり、穴を掘って遊ぶ。そばで、4歳児クラスの男児4人が、ぼうぜんと見ているがかわりはない。会話はポルトガル語が中心だが、「あわしまこいっ、ばちっ。」「うるさい。うるさいけどね。うるさいじゃん。」といった日本語が混じる。(写真9)「ぼくらの…ミッキマウス、ミッキマウス、ミッキミッキマウス」とミッキマウスの歌をうたう。「ぼくは、ぼくは、ぼくは。われこそは。」といって、持っていた鋤を投げる。
- ②足洗い場にいる日本人男児たちに、台所洗剤の空き容器に入れた水をかけて、ふざける。「あっ、ここにね。」といって、男児のお尻にからかいながら、水をかけてふざける。
- 7月7日
(10か月1週間)
- ①教室で、隣の男児の手ぬぐいの絵を、冷やかして、「ワッハハハハ。おっばい。」と笑いながら、奪い取ろうとしたりたたき合う。「ワッハハハハ。おまえな。」とはやし立てる。最後に男児が泣き出し、担任がやってくると、様子を上目度うかがいながら、自分の手ぬぐいを黙ってたたみ始める。(写真10)
- 7月13日
(10か月2週間)
- ①(保育実習生が新聞紙を使った遊びを、遊戯室で年長児に教えている場面で、)クラスメイトの日本人男児と肩を組んでいる。「おれ、わかったぞ。」とそばの男児にいう。「おう、ハンカチ」と新聞紙を小さく折り畳んで、自分の顔を拭くまねをする。
- ②チアゴと一緒に新聞紙のくずを拾い集め、グスタボとそばの日本人男児のシャツの背中に、押し込む。グスタボが泣き出す。紙をかき集め、チアゴの所に持っていき、ポルトガル語で会話。チアゴやグスタボの背中に新聞紙の固まりをぶっつける。そばを通った日本人男児の顔、ついで自分の顔を、新聞紙を丸めて作ったグローブでたたく。
- ③給食の時、隣にいる日本人男児だいすけと、顔を見合わせながら、ひそひそ話をしている。「だいすけは、だいすけは。」「なに」「だいちゃんがおれにくれる。」「これ、なに。たかしのいちばんはしっこ。」「だれの。おれのおれの。たかし。おれのおれの。だいちゃん。おれの。」「ちがう。だいすけ。おれ、おれだけ。」かなり長いフレーズの、日本語を話している。
- ④だいすけと一緒に二人で手を合わせ、「手を合わせて下さい。ありがとうございまして。」だいすけとお互いのおかずを、はしで摘むまねをしてふざける。「こんどはパン。こんどはぎゅうにゅう。」「えいじどこいった。」「これたべたーい。」「おれ、これいっぱいいたべたい。」「おかわりよ。」といった、非常に長い日本語の会話がだいすけとの間で続いた。(写真11)
- 7月20日
(10か月3週間)
- ①誕生会が終わって、ヘンリと手をつないでいるところに、チアゴがやってきて、チアゴの首に下がっているプレゼントのカードにさわる。会話は、ポルトガル語。
- ②「にんぼうです。ヒフォファ、ファファト」とヨウヨウを振り回しながら、ジョアナを攻撃してふざける。(写真12)
- ③チアゴとポルトガル語で話しながら、「チアゴ。チアゴみつけた。いっぱいある。」といった日本語も混じる。



写真7 男児の背中をたたいて、ふざける（入園9か月3週間）



写真8 チアゴヤクラスメイトたちと色水遊び（入園9か月3週間）

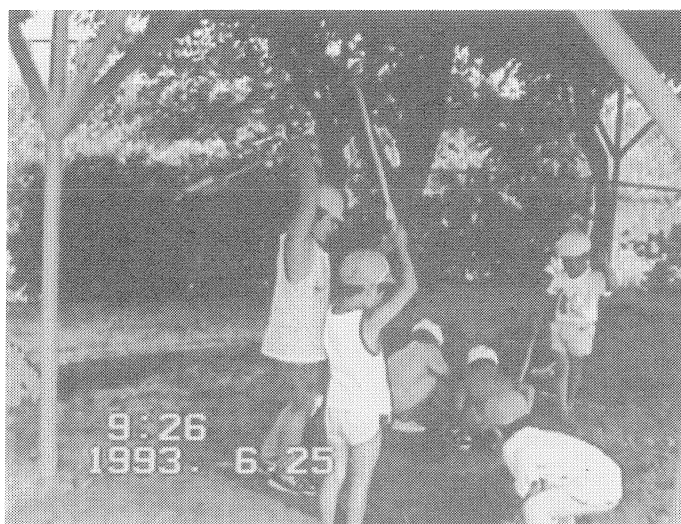


写真9 チアゴ、グスタボと3人で（入園10か月）



写真10 クラスメイトとふざける（入園10か月1週間）



写真11 仲良しのだいすけのおかずを（入園10か月2週間）

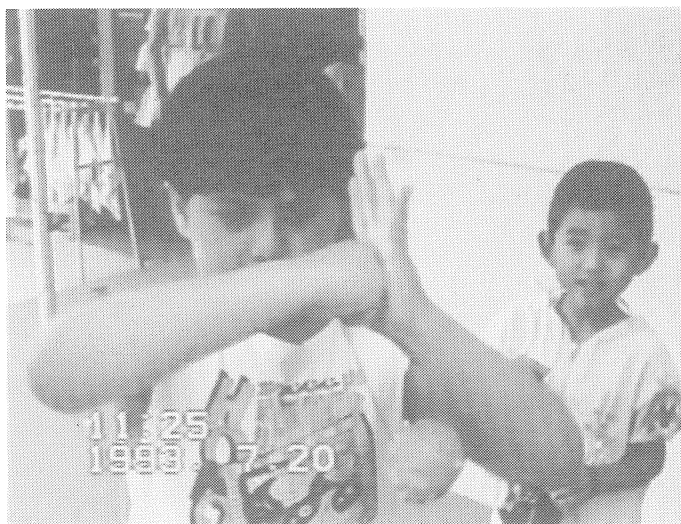


写真12 「にんぼうです。」（入園10か月3週間）

日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（Ⅲ）

7月28日
(11か月)

- ④水道の所で手を洗っている日本人男児に、「大きいある。それプレゼント。」と話しかける。
- ①チアゴとその弟のジョニーと3人で、シャボン玉遊びをしている。会話はポルトガル語が中心だが、「うわっ。すごい。」といった日本語が混じる。(写真13)
- ②だいすけがやってくると、「だいちゃんみて。」といいながら、紙円盤をとばす。だいすけが囃し立てると、「おお。おーし。だいすけ。おお、だいすけ。」と叫ぶ。
- ③アキラがやってくると「アキラくん、やる。」と声をかける。
- ④再び、チアゴとジョニーの3人で、シャボン玉遊びを始めるが、会話はポルトガル語。
- ⑤遊戯室で、チアゴと音楽に合わせて、ゴーゴー風の踊りを踊っている。会話はポルトガル語。
- ⑥プールで(設定保育の)水遊び。だいすけの後で順番を待ちながら、「さむい。だいすけ、さむい。」後の男児が髪を引っ張ると、「あ、いたい。」「じくじく。」といいながら、だいすけをくすぐるが、やめてといわれるとすぐにやめる。(写真14)
- ⑦「おれが2ばんだった」と日本人男児と2番を争う。後で、その男児が怒って背中を引っかくが、気に留めたようすがなく、「これ、いちばんさいごじゃない。」となだめる。

9月22日
(1年3週間)

- ①チアゴと3歳児クラスに行き、割り箸で作った鉄砲を振り回しながら、「チアゴ。レチシアも、へらのフキン、へんなのふきんだよね。また、ぐちゃぐちゃ。こうやってやる。」ポルトガル語に時折、日本語を混ぜながら、「ほら、ぼちゃぼちゃね。チアゴ、あの人スーパーマン。たのしいよ。」「いいですね。」「チアゴ、ぼくどれにしようかな。…のいうとおりですが、き、じゃ。(節を付けて)」「アンドレ、へんなの。」「チアゴ、いっぱいもって。」「どこだゴム。」「あ、ぼくも。ぼくとチアゴね。」時々ポルトガル語を交えながら、「チアゴ、ゴムとって。」と日本語を話す。(写真15)

10月6日
(1年1か月1週間)

- ①(担任やクラスメイトたちと運動場でリレー)だいすけをだきあげる。「ゆうくん」「いちい、やった。」とだいすけと手を取り合って、クラスメイトたちとはしゃぎまわる。そばにいた男児が、だっこしてとせがむと、快くだっこする。(写真16)「まさのり、まさのり。」「ゆうき、ゆうき。」「なお、はしれ。」リレーに熱中する。
- ②「おまえめた。はは。おまえ3ばん。」とそばのジエゴをからかう。はちまきをふりまわし、カンフーのようなしぐさをする。
- ③大きな木の車輪に乗り白と青の旗を振っているチアゴが、「ジュニオールチーム、2番。」と叫ぶと、「これがおれの」といいながら、旗を奪う。別の大きな車輪にのった男児に「たかし。うえていっぽん。あお、やった。こうやって、えいっ」と手に持っていた青い輪をとばす。
- ④男児(たかし)に、大きな車輪を譲ってもらい、そのうえに乗って、「ピーターパン。ピーターパン。」「おうーい、スタート。」とチアゴのまねをして、大きな車輪に乗って動かしていく。「おれ、まけている。だいちゃん。チアゴにあげて。」「ピーターパン。ピーターパン。ハッハハ。だいちゃん、おれピーターパン。」青い輪を、チアゴに投げ、「おーい、チアゴ。」投げ返されると、「すげえーじゃん。」後はポルトガル語になる。
- ⑤チアゴが、ジエゴやジョアナやエリキたちとままごとをしているところに行き、ポルトガル語でチアゴに話しかける。「え、なんで6さいやってる。」とチアゴを、他の遊びに誘う。
- ⑥チアゴがグスタボとブランコに乗り始めると、チアゴの所に行き、ポルトガル語で話しかける。グスタボの頭をたたき、グスタボがよそに行くと、そのまま二人でブランコ乗りを続けるが、会話はもっぱらポルトガル語。「ジョニー、もう1っかいそのかおやって」とブランコに乗りながら、チアゴの弟に声をかけただけが、日本語。
- ⑦チアゴとグスタボの3人で、運動会で使った大きな張り子を、蹴って穴をあける。壊れた穴の中を、チアゴ、ついでグスタボを抱き上げ、のぞかせる。



写真13 チアゴとその弟のジョニーとシャボン玉遊び（入園11か月）



写真14 「だいすけ、さむい」（入園11か月）



写真15 チアゴと3歳児クラスに（入園1年3週間）



写真16 「ジュニオール、だっこして」（入園1年1か月1週間）

(写真17)「ねえ、おまえ。つぎ、おー。」といいながら、張り子を蹴飛ばす。
チアゴやグスタボもまねをして蹴る。

10月29日
(1年2か月)

- ① ジエゴが、縄跳びの縄を遊具の柱に結び、振り回している所に行き、縄の端を受け取り振りまわす。次に、ジエゴと縄を引っ張りっこをしてふざける。
- ② 教室で画用紙をメガホン状に丸めて作ったものをめぐって、同じグループのクラスメイトたち(だいすけとたつや)と言い合い。「おれのは、これ。」「これ、おれのだよ。だいすけ、だいすけがつくった。たっちんが、つくった。」「えっ、ちがうよ。1 こがいい。だいすけだよ。じゃあ、これがおれのか。」「どれ、これがおまえのだよ。」「ちがう。うん、これだれの。」「おれのは、だいすけ。おれのは、おれの。」「3 こ、おまえ3 こ。じゃあ、みて3 こ。」「これ、どれがおまえ。」「これとどれ。はやく。」「これみて、かっくん。かっくんちょっときて。これ、だれの。」「ひゃあーおでぶ。」「だいすけから、紙を渡されると、「じゃあ、3 こ。1, 2。」「うおっ、でかい。これおまえの。」「③ ジエゴに話しかける。「なにやるの。」「なにやりたい。ジエゴ、なにやりたい。」「なにこれ。」「おなじのジエゴ。」「④ だいすけの紙メガホンを奪って逃げる。だいすけが、「かえして」と追いかけると調子に乗って逃げ回る。」「⑤ クラスメイトの男児を、紙メガホンを使ったチャンバラに誘う。チャンバラをしながら、「ひょう、また。あんたは、ばかやろう。ねえ、こうやってよ。」「こうやって、おおきいやつよ。」「激しく打ち合いをして、相手の男児がぶいっとよそに行ってしまうと、「ええっ、こわいじゃん。)(写真18)」「⑥ 教室で、だいすけやたつやたちと話している。「ちょっとみて。」「こい、やってやる。どれがすきな。」「やすい。これ、ジュニオールだよ。」「100えん、やすい。やすい。」「ねえ、たつや。やすいね。だいすけ、ゲームボーイ。」「ねえ、だいすけ。おれ、1 こでないよ。おれ、1 こでないよ。」「だいすけ、おまえのけ。だいすけ、だいすけ。」「みして、おれのけ。みして、へえ、おれのけ。」「だって、ほらこうなるだろ。」

注) 表中の人名で、カタカナ表記は日系ブラジル人幼児、ひらがな表記は日本人幼児を表す。

新年度になり、ジュニオールも入園7か月を経過した。新しい日系ブラジル人の子どもも加わり、ジュニオール周辺の仲間関係にも、新しい変化が見え始めている。前年度入園当初から親密な関係を形成していたチアゴ、それから入園2か月半頃に他の保育園から転入してきたジエゴとの親密な仲間関係は、新年度になっても基本的に維持されているが、前年度観察されたような閉鎖的な雰囲気のあるエスニックグループの特色は、薄れ始め、母国語ポルトガル語によるコミュニケーションから、日本語によるコミュニケーションの頻度が増加してきている。それに新しく入園したグスタボ(5歳児クラスで、チアゴと同じすみれ組の男児)等の日系ブラジル人幼児、それからクラスメイトの日本人男児が、ジュニオールの仲間遊びの相手として、加わってくる。

新年度になって最初の行動観察では(入園7か月2週間)、日系ブラジル人幼児との関係が主体だが、日系ブラジル人のチアゴ相手に、たどたどしく断片的なものではあるが、明らかに日本語によるコミュニケーションが出現している(4月14日エピソード②)。勿論、日系ブラジル人幼児とのコミュニケーション言語は、まだポルトガル語が主体である。

しかしながら、入園8か月2週間にあたる5月12日には、閉鎖的な雰囲気のあるチアゴとジエゴとのエスニックグループに、クラスメイトの日本人男児を交えた仲間遊びを展開し(写真4)、ほとんど日本語会話が中心のエピソードが、観察されている(同日エピソード①②)。これは、始めて観察された急激な変化である。この頃から、ジュニオールの日本語に急激な進歩が見られ始め、日系ブラジル人仲間との会話にも、ポルトガル語に日本



写真17 グスタボを抱き上げて（入園1年1か月1週間）



写真18 クラスメイトとチャンバラ（入園1年2か月）

語が混じり始める。ただし、この頃の日本語会話は、イントネーションや発音が、まだポルトガル語なまりというニュアンスが強い。

入園9か月を過ぎた頃から、日本人幼児との関係にも、さらに打ち解けた様子が観察され始める。日本人幼児との関係には、断片的・瞬時的なもの（5月26日エピソード②・写真6；6月21日エピソード①・写真7；6月26日エピソード①）から、クラスメイト男児との親密で持続的なもの（7月7日エピソード①・写真10；7月13日エピソード①）へと変化してきている。さらには、入園10か月2週間頃には、日本人クラスメイトのだいすけ（仮称）と、明らかに親密な友人関係が形成され始めたことを示す行動が、観察され始めている（7月13日エピソード③、④・写真11）。また、同日のだいすけとの日本語による会話は、かなり長いフレーズで複雑なコミュニケーション内容を伴ったものとなっている。だいすけとの親密な関係は、その後も頻繁に観察されている（7月28日エピソード②、⑥・写真14；10月6日エピソード②；10月29日エピソード②、⑥）。勿論、チアゴといった日系ブラジル人の友人との親密な仲間関係も、ポルトガル語の会話も、維持されている。

以上、前年度、日本の保育園の中でやや閉鎖的なエスニックグループを形成し、そのため、日本人幼児との仲間関係の展開や日本語の進歩に停滞が見られていた、日系ブラジル人幼児のその後の7か月間のダイナミックな変化を追った。この事例の場合、異文化適応の初期に示したエスニックなグループ形成は、明らかに異文化適応のステップとしてごく自然に生じた過渡的な現象であり、次のステップではそのエスニックグループを基盤にしながら、徐々に日本人幼児との仲間関係の拡大へと、劇的に仲間関係を展開させている。それに伴い、第二言語である日本語の獲得面でも急激な生じてきている。これは、明らかにこの事例が異文化適応初期に示したエスニックグループの形成が、異文化適応の1つのステップであったことを、示しているものと考えられる。

この事例の場合、エスニックグループの形成を可能にする条件が偶然そろっていたということもあるが、この事例が示した特異な異文化適応パターンは、やはり幼児の異文化適応パターンとしては特異なものであるのか、それとも類似パターンが多数観察されうるような代表的な1つの異文化適応のパターンであるかは、研究の現状からはまだ結論づけることができない。しかし、異文化適応初期に観察された、やや閉鎖的な雰囲気のエスニックグループの形成は、異文化不適応状態を示すというより、異文化適応への1つのパターンと解釈するのが的確であるといえよう。幼児に限ったことではないが、子どもの異文化適応の様々なパターンを解明していくことは、決して異文化適応のコースが1つの決まり切ったステップによるのではなく、多様なコースが存在していくことを明らかにしていくだろう。

なお、本研究で開発してきた、ビデオカメラを用いた縦断的な観察による映像資料の質的な分析手法を、こうした微妙なニュアンスを伴う質的な変化を分析する手法としては、それなりの発展性を持ったものと判断している。さらに、より客観的で精密な映像資料の撮影・収集技術、分析手法の洗練化が必要であるが、さらに満足すべき手法が確立されさえすれば、実証科学を標榜する心理学の中で、ともすれば非科学的とみなされがちであった事例研究に、より科学性を与えていくといえるだろう。ただし、そうした科学性の確立は、すべての事象を数値化できる計量的データに変換しなければ科学的研究とはいえないとする、伝統心理学の偏狭な計測主義の発想では達成されない。簡単に数値データに変換

できない，もしくは安易に変換してしまうと本質が損なわれてしまうような質的データの独自の科学的・客観的な分析法の開発こそが，近年心理学に求められている研究方法上の1つの課題であることを，つけ加えておく。

引 用 文 献

- 宮川充司・浅井道子 1988 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応：入園後の半年
会津短期大学学報，45，25-44.
- 宮川充司・浅井道子 1989 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応（その2）：入
園後の半年から1年半 会津短期大学学報，46，37-81.
- 宮川充司・中西由里 1994 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（Ⅰ） 椋山
女学園大学研究論集，25（人文科学篇），47-74.
- 中西由里・宮川充司 1994 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究（Ⅱ）－入園
当初3ヶ月間の分析から・2児の比較－ 椋山女学園大学研究論集，25（人文科学篇），75-84.